

藝大の教員たちが、
日々の研究やレッスンに勤しむ
「研究室」のなかには
どうなっているのだろうか？
なかなか見る機会のない部屋を
潜入ルポする。

正確きわまりない模写

天井が高く、北側の大きな窓から光をいっぱいに取り入れた、制作アトリエのような研究室では、四人の学生たちが机に向かって細かく絵筆を動かし、二人の留学生在が大作の制作に余念がない。

ここは日本画大学院第三研究室。現在、手塚雄二教授、吉村誠司准教授、廣瀬貫洋講師を中心に、松岡歩、上野高、繭山桃子の教育研究助手という体制で、修士二年六人、二年四人、博士一〜三年が一人ずつと、計一三人が学んでいる。修士課程では、古典作品の模写を主軸にして同時に制作も進めており、博士課程では制作が中心となる。学生たちは、全員美術学部で日本画を専攻してきた学生ばかり。訪問した教室は修士一年の六人のクラスだ。この研究室で行う模写は現状模写といって、絵柄だけでなく、オリジナルの紙のシワや瑕、全体の濃淡なども描き写すという、たいへん精度の高いもの。現在手がけているのは出光美術館所蔵の国宝「伴大納言絵巻」。平安時代の人びとの様子を生き生きと描いた傑作である。現状模写は、まず原寸大の写真に薄美濃紙

をあてて上げ写しを行う。上げ写しとは、ちょうどアニメのセル画をつくるようなように、あてた和紙を何回も繰り返し返しめくって、寸分たがわずに転写すること。ごく細い筆と油煙墨を使う集中力を要する丹念な作業で、失敗が許されない一番重要な工程だ。たとえば、ごく細かい線をきれいに描き写すには、筆で線を引くのではなく、点を打って線の形を出す。こうした作業が一日でどのくらい進むかというところ、最大で五百円硬貨一枚程度の範囲だから、辛抱のいる仕事だ。一枚を写し取るのに半年はかかるそうだ。

上げ写しが終わると、強度を保つため本紙と同じ薄美濃紙で裏打ちし、パネルに張り込んで彩色作業に入る。彩色には岩絵具や水干絵具、染料など、実物に使われていたと推定される絵の具を慎重に吟味して使用する。彩色作業では、所蔵先の厚意で二年間で計四回にわたって国宝の現物と比較して色調を合わせるという、めつたに得られない贅沢で貴重な体験もできる。国宝を前にした作業は、ものすごく緊張するという。

こうして二年間かけてようやく一枚が完成する。「学生たちが仕上げたものは、原画と並べて展示しても、どちらが本物かわからないほどパーフェクトなものです。ここまでできるのは、この研究室だけです」と手塚教授は胸を張る。

自分で方法を見つけ出す

このようにたいへん高度なテクニックを必要とする模写だが、そのノウハウを先生がいちいち学生に教えるという方法はとらない。「何から何まで教えてしまったら、それは学生の勉強にはなりません。自分たちが考え、間違ってもいいからやってみることが大切な

のです」。

正解は唯一ひとつ——原画とまったく同じものにする、である。そのための方法はひとつに限らずいくつあってもよい。そこで学生たちは、どうしたら望む結果が得られるか、自分で一所懸命考えながら作業に臨む。

「技の伝達はもちろんですが、それだけでなく（考える力）を身につけてほしい。学生の自発性を最も大切にしています。ですから、一番ものを教えない学科ですね」。これは学部のとよからの一貫した教育方針でもある。もちろん、わからないことや迷うことがあつたら、先生や助手の人に相談するわけだが、もうひとつ大きな援軍がある。それは先輩たちが残してくれた何冊ものノートだ。

このノートには、模写の技術について先生や先輩の助手たちから受けた講義内容をはじめ、実際にどこをどのような方法で模写したか、また、工夫や編み出した方法などが、ときには写真入りで詳細に記されている。これを参照すると、問題解決のヒントが得られたり、先輩たちが苦労した跡もわかり、とても勉強になるわけだ。

現在模写の作業を続けている学生たちも、自分で試行錯誤したり、新たな方法を編み出したしたりした、その工程や結果をノートに書き込んで後輩に残していく。この研究室の歴史は長いので、こうしたノートによるノウハウの蓄積がたくさんあり、学部者にとってはまさに宝の山だ。ノートは、模写作業の成果報告書としてまとめられ、原画の協力をいただいた美術館に提出される。

模写によって美の根本をつかむ

では、なぜそこまで精細な模写をするのだろうか。



上げ写しが終わわり、パネルに張り込んで彩色作業にとりかかる



1：研究室で模写に集中する。この姿勢がつづくので腰が痛くなる 2：彩色に使う岩絵具 3：筆は各種のものを使うが、自分でカスタマイズしたものもある 4：模写の進行を見守り、適切なアドバイスをする手塚教授（手前）と吉村准教授（奥）

「二年、二年をかけて模写をやると、まず、古典作品がどのようにして描かれているか、わかるようになります。作品を分析し、読む力ができてきます」と、手塚教授は模写の意味を説いてくれた。

「理論的な分析ではなく、日本の文化のうちで最も美しいものを模写することによって、自分の心とからだの中に、美しい形、美しい色が入ってくる。それを基準に、ものごとを見たり考えたりできるようにするのが、模写によって作者と自分を重ね、追体験することにより、自分はこの作品を読むことができた、理解することができた、という自信も生まれてきます」。これは何物にも換えがたい財産となるに違いない。

「日本の美の根本がわかる授業といつてよいでしょう。〈学問〉ではなくて、自分の手や目から入ってくる感性、それを育てたいのです。そうすると、制作するときにも、その経験が生きてくる。つまり、模写を通じて、絵描きになるための修練をしているわけですね」。模写の目的は、あくまでも日本画を描くための勉強なのだ、と手塚教授は強調された。

吉村誠司准教授も「日本画の画材で、新しいものをつくっていくのがこの研究室のスタンスです。そのため、まずはきちんと日本画の基礎を身につけた人間を育てたい。発展や飛躍はそのあとでやるべきものですね。真のオリジナルをつくり出すために、古典を勉強する。いわば創作の芯となる学科です」と研究室の狙いを語る。

ここで学ぶ学生たちも意欲的だ。伝統的な日本画の運筆の美しさに感動したのがきっかけで日本画を専攻した中村桃子さん（修士一年）は、「学部で現代の日本画に触れ、基礎的な材料論を学んだことで、歴史や技術に興味が湧きました。今ならもっと深く古典を知



5, 6: 模写制作の過程や方法が詳細に記録されたノート（写真6は第三研究室提供） 7, 8: 完成した模写「伴大納言絵巻」の一部。原画と区別がつかないほど精巧 9, 10: 制作にとりかかる中国（男性）とイラン（女性）の留学生たち

ることができるのではないかと考えてこの研究室を志望した。

曳地聡美さん（修士二年）も、「模写を勉強することで、技術的なことも含め自分の制作の糧になると考えてここに入りました」と語り、「制限された時間の中で、どこまでやり遂げられるか、自分との戦いです」と、模写の厳しさを実感している。

平安の三大絵巻完成が目標

藝大の模写の歴史は古く、芸術資料館（現在の大学美術館）には東京美術学校時代からの模写作品が数多く収蔵され、創作研究にとつて古典作品の模写が重要なものとされてきた。二〇〇三年、平山郁夫教授によって「敦煌莫高窟壁画」の模写が完成した後、手塚教授と吉村准教授の指導のもと、国宝「源氏物語絵巻」の現状模写が始まった。七年間かけて計五六面を、協力美術館への寄贈と藝大収蔵のため各場面二点ずつ完成させている。

現在進めている国宝「伴大納言絵巻」の模写が終わる三年後には、朝護孫子寺蔵の国宝「信貴山縁起絵巻」にかかる計画。それが一〇年近くかけて完成すると、平安の三大絵巻が藝大にそろうことになる。

第三研究室の卒業生たちは、一部が画家として立つほかに、ほとんどが絵の関係の仕事についている。職業の幅は意外に広く、精細画のイラストレーターになったり、大河ドラマの美術や時代考証を担当したり、印刷局で紙幣の文様を描いたり、変わった例ではゲームソフトの画像制作もある。

この研究室は、日本画の真髄とその技芸をしつかりと学び、絵画の粋を身につけることによって、さまざまな美を生み出す仕事で活躍する人材を輩出する学科なのである。